

茨 尽きぬ名残り

近松寿子捌

明雅師へ尽きぬ名残りよ冬紅葉

近松 寿子

たゆたう海に浮かぶ水鳥

式田 恭子

つつましき笑いのなかに酒酌みて

登坂かりん

遠くに聞くは祭太鼓か

吉藤 一郎

涼み台将棋楽しむ母と孫

権頭 和弥

鼻緒のすげ方ハウツウの本

島村 暁巳

月仰ぐ鏡の部屋のまくらがり

弥

猫じゃらしにて焦らす世之介

巳

秋拾愛という字を包みこみ

恭

百円シヨップで買った玉チヨコ

郎

バーチャルにどっぷり浸る現代っ子

ん

凍土はるかな戦いの跡

恭

臍出して風邪ひき添えて駆けくらべ

弥

威張らないのが彼のいいところ

ん

無味無臭蒸留水のたよりなさ

巳

佐保姫の出る山間の村

郎

釣鐘を埋めんとする花吹雪

恭

朝寝の夢は火星生活

ん

型式は「二十韻」を用いさせていたか、と思いましたが、却って失礼になるかも、と「茨」を用いさせていただきました。

「茨」は「表合十句」を変化させたものです。「表合十句」(発句・脇・第三は歌仙等に順じ、十句の中に四季を詠み込み、月・花・名所・神祇・釈教・恋等をあしらう。月・花の定座はないが素秋は忌むので「秋月」となる)は短時間で連句を楽しめますが、本来は格調ある形式なので、憚って「表合十句的連句」と称して「茨の会」で愛用、それを発展させて句数は時間によつて、八句になつても十二句・十四句になつても、として「茨」と称しております。

二十韻

そぞろ寒

小林しげと

鳩一羽鳴くにつけてもそぞろ寒

小林しげと

主なき庵に風の昼月

佛淵 健悟

盃に猿酒酌めば賑わいて

丹下 博之

調子はずれのシャンソンも出る

松本 碧

きっかけはドレスの裾を踏んだこと

紺野千寿子

戒律越えて結ばれし仲

佐古 英子

空港の誘導灯が海沿いに

と

冴ゆるとばかり銀河横たう

之

おでんやの屋台曳き曳き四十年

悟

見るに見かねて拾う捨て猫

碧

爪研いで機を動かす綴れ織

英

「受付ケテマス」録画予約を

千

淋しさを独りで耐えて聞きじょうず

悟

白玉にまで口紅のあと

千

若冲の群鶏蔬菜凶月涼し

碧

不治の病を治す漢方

英

借りてきた辞典の上に嬰が立つ

悟

座布団投げに通う春場所

千

アンダンテ・プレスト・ラルゴ花に和す

之

木馬よ回れまわれ永日

碧

二十韻

冬菊

本屋良子捌

お別れの朝の冬菊活けにけり

本屋 良子

客人のため捏ねる蕎麦搔

根津 忠史

創作曲さびの部分は三線に

八代 嫺

古書店街を吹き抜ける風

青木 秀樹

雲切れて満月火星ランデブー

難波さえこ

残り香ほのと秋裕より

久保田庸子

後から抱きついたのは捨案山子

史

顔を見合はせ道祖神笑み

良

西へ行く旅路の伴に十七季

樹

リュックの底にこそと二合半

こ

^{ナオ}乗鞍岳雪溪深く蒼々と

庸

ぼんぼん鳥に昇りくる月

嫺

草庵に忙中閑を決めこみて

良

ですだ だだよと祖父の口癖

史

ジャンギヤバンばりの洪さに溺れさう

嫺

ひつかき傷はたれが付けしか

樹

^{ナウ}正座して反省猿の礼あつく

こ

夢膨らませ入学の子等

庸

花守は枝垂大樹の幹を撫で

樹

春の炬燵に捲るグラビア

嫺

冬霧

内田麻子捌

大き師の消えて冬霧おほふ街

内田 麻子

残る紅葉の色の様様

浅賀 丁那

バイオリン削る手作り念入りに

五十嵐讓介

マドレーヌ焼く幼な姉妹

長崎 和代

南仏の古城にかゝる望の月

峯田 政志

君こそ命通草からみて

岩垂 景翠

恋にめしひ人形振のお七さん

代

角の八百屋は未だ猫車

那

神鈴を鳴らす平和を祈りつつ

翠

源氏絵巻に列なしてゐる

代

^{ナオ}乗ることは遂にかなはずコンコルド

志

涼しき月を仰ぐ国境

那

冷酒を友と揃ひの盃で呑む

介

昭和をかけて長きわが愛

那

樽では身持の堅きニューハーフ

翠

影鮮やかな魚群探知器

代

^{ナウ}着実に中国の元力つけ

志

目貼りを剥げば常念の岳

翠

花行脚シルバー切符で西・東

介

働き蜂のひたむきに飛ぶ

志

二十韻

百代の

坂本孝子捌

百代の過客や今し鶴渡る

坂本 孝子

面影ばかり積もる雪嶺

川名 将義

保育園足踏みオルガン弾むらん

山田美代子

フリルの服は姉のおさがり

秋山志世子

半斤の豚肉を買ふ月の市

高橋 豊美

秋の祭の相撲勝ち抜き

中川真紀子

風聞は紅葉の岸を出でしより

義

秘めし香りの残る船室

代

頬杖をつけば切なき昨夜のこと

紀

ジーコジャパンは点が取れない

義

自衛隊行くかイラクは熱砂の地

世

月涼しげな小芝居の木戸

紀

お皿よりお札数へる趣味を持ち

義

男冥利よ逆玉の輿

紀

それなのに何処で貰った冬風

代

タトウ拭へばあっさりと消え

豊

古酒泡盛インターネットオークション

同

速度違反で追ひし逃水

義

花明かり翁の寝息安らかに

孝

耳の底にはふらここの音

世

二十韻 紅葉かつ散り

副島久美子 捌

紅葉かつ散りて恩師の逝きにけり

副島久美子

声なき言葉たどる深秋

村田 富美

始発バス織りし月は山の辺に

小池 啓子

三段折りの軽量の傘

染谷佳之子

阿弗利加の陸上競技拔きん出る

林 壤

BS放送ばかり見てゐて

佐藤 良弥

ひそかなる想ひ告げずに転校し

之

恋の遍歴地図に赤丸

富

白鳥の飛来の数を掲示板

啓

地吹雪ツアー職場仲間ナオで

壤

自治体ナオの歩行禁煙いま一步

弥

夢の中にて祖母の戒め

同

フジ子ヘミングピアノの音色やはらかく

啓

うなじの汗の匂ひ悩まし

之

波乗りは月夜の海に二人して

富

マルスいつしか消えてゐる空

之

こだはりのスローフードナウで酌む地酒

啓

庭の菜園耕しの時

壤

花乞食西に東にいとまなく

弥

領巾なびかせて笑まふ佐保姫

執筆

二十韻

面影や

中田あかり捌

面影や三寒四温の恩溢れ

中田あかり

さざんか肩にやあやあと声

杉山 壽子

新幹線発車寸前とび乗りて

中林 あや

たたんでしまふ折りたたみ椅子

根津 美紗

山の端に不思議な色の月かかり

棚町 未悠

拝み太郎が拝むふりする

池田やすこ

熟したるまるめろの香の君を抱き

や

おませなあの子ダイエツト狂

紗

めだたない歯軋りの法思案中

や

有効活用して欲しい税

壽

湖ナオに小波涼し弦の月

こ

滑るヨットに白ワイン飲む

悠

北斎の落款いづこ龍と亀

紗

詩人でならず遁走の果

同

牡丹鍋逢へば泣く癖いとほしく

こ

きぬぎぬの雲いまだ紫

り

歌膝ナウの袴畏こむ神の前

壽

春告鳥に微笑ひろがり

悠

みどり兒の抱き癖つきし花筵

紗

畦青む中よぎるジヨギング

悠

二十韻 時雨

市野沢弘子 撰

降り止まぬ時雨にかくす涙かな

市野沢弘子

冬の木立の続く細道

松原 弘子

図書館のカード調べる声のして

山寺 たつみ

赤いジャージーけふの当番

吉池 保男

月昇る飛行機雲の彼方より

須賀 敬子

願ひの絲の一糸もつれし

花巻 珠枝

焼栗を二人で食べた街遠く

敬

セーヌ流るる古き石橋

男

通販でビデオカメラをつい買って

(松) 弘

孫の来るのを待ちわびる爺

敬

くちなはの横切る庭の苔むせる

み

冷酒あふりつ月を仰げり

(松) 弘

梯子差す神田明神鳶の技

男

おててつないで渡る踏切

枝

ダイケアー愛を育むカップルも

み

皆既日食映す南極

同

切っ先に独楽も回して五十年

枝

国歌斉唱うらかに聴く

(松) 弘

飛球追ふ少年野球花の下

み

弁当箱にとまる白蝶

敬

二十韻 初しぐれ

上月淳子 捌

初しぐれ石の蛙も共に哭け

上月 淳子

寒竹の子に注ぐまなざし

中野 昌子

蔵書印丁寧に押し本棚に

吉村 糸みこ

通りすがりに碁を打ちに寄る

青木 泉子

昼の月裏庭に干す濯ぎ物

桑原 美津

美男蔓は赤い実をつけ

本田 弥生

衣被不器用な娘にむいてやり

泉

モンローぱりのしなふ曲線

こ

象使ひやっぱり飴も使ふのか

泉

下戸が仕切れる宴席の順

昌

ナオ
「百年の孤独」*に耐へる舌鼓

オープンカーで月の高速

生

BGMなぜかバツハのエンドレス

泉

万引きの癖かばふ年下

津

我知らぬ黒子めでらる面映ゆく

昌

口移しにて習ふ声明

こ

ナウ
るるぶにもちゃんと出てゐる鯛焼屋

泉

烏二三羽雪しろの水

津

やあやあと主笑み来る花館

こ

集ひし客の話のどらか

生

*「百年の孤独」焼酎の銘柄

二十韻

かじけ猫

原田千町捌

いまは亡き師を求めをりかじけ猫

原田 千町

雪踏みのあと辿る細道

吉田 憲助

遠嶺まで透き通りたる広野にて

山田 華蔵

百円バスもボディー広告

山口 美恵

書き馴れしペン滑らせる月の窓

橘 朱鷺子

隣に貫ふ太き落鮎

若松 香

紅葉は赤に黄色に並木道

加藤 治子

彌撒聖祭染める絵硝子

香

嫁さんはガラシヤ夫人のやうなひと

美

五臓六腑は彼だけのもの

香

^{ナオ}めくるめく海賊の汗ほの甘く

美

雅な節を伝ふ島唄

朱

小公園乳母車にてパンを売る

華

マリオネットで遊ぶ子供等

治

月光に樹氷きらきら輝けり

同

追っかけ人生加奈陀阿弗利加

朱

^{ナウ}あひみての後の心の深くして

華

蝶の切手の封筒の破れ

美

十一面観音菩薩花万朶

町

瓢の酒を受くる麗日

朱

二十韻

小春空

豊田好敏捌

掌中の珠の如くや小春空

豊田好敏

松いとほしみ着せる霜除

梅田利子

だまし絵の窓の内なる団欒に

古賀一郎

ギターデュエット音の外るる

矢崎 藍

^ウ正統派持して満月かかりをり

五味 蓉子

翼連ねて渡り来る鳥

山本 要子

温め酒胸の谷間で仕上げして

蓉

キスにこめたる野望欲望

藍

バザールに千夜一夜の兵器商

郎

らくだの道を砂嵐吹き

利

^{ナオ}枇杷葉湯肌いっばいに浸らせて

要

いつか魔法の解ける石像

藍

マザコンと囁かれてもピンと来ず

蓉

十年過ぎて振り向きし恋

利

泥鰌掘る今どきなんでこんな月

郎

コーヒーの味蘊蓄も濃く

要

^{ナウ}ダイエット黒酢黒豆黒い米

蓉

古き雛市母とひやかす

敏

「ほい来た」と先生の声花吹雪

藍

見らみな集ひ揺らすふらここ

要

温め酒

蒲原志げ子捌

浄土までお持ち召されよ温め酒

蒲原志げ子

肥後もっこすの凜々し袴着

中川 凡

一歩一歩橋懸りへとすり足に

青島ゆみを

パソコンマウスあらぬ方へと

篠原 達子

月の下最終原稿届くらん

佐々木有子

新蕎麦すすする妻は幼き

中川 哲

あくがるる『秋の童話』のごとき恋

鈴木 茂

核シエルターの展示販売

凡

ウイルスとヒトの攻防果てしなく

達

さはさりながら朝飯を食ふ

を

賭け事に何故だか強いわが家系

達

少し働きゃ汗でぐっしより

有

ナイターのさよならホームー月へ飛ぶ

達

スキヤンダル誌が暴く密会

哲

そんな目で胸を見ないで顔を見て

茂

白黒つけぬ灰色も良し

有

維新へと志士ひたすらに剣をふり

を

角なき鹿を追ひかける子等

凡

有る筈の姿かき消す花嵐

哲

夢のつづきか蝶々の舞ふ

茂

二十韻 狸毛筆

下鉢清子捌

立机の日「卓の上貝母はいもの花と狸毛筆たたけふで 明雅」のご染筆を賜りて

狸毛筆小春の卓に均しけり 下鉢 清子

南天の実のつぶらなる頃 松島アンス

シンフォニー指揮棒凜と振られゐて 井上 蘭石

学生鞆膝に少年 間 佐紀子

錦秋ウの彩の幾重を袖とせん 鈴木千恵子

そぞろに寒き踏切の端 梅田 實

帰りたくなくて見つめた君と月 石

ハットトリックべた惚れとなる 千

ミステリーサークル残る芝の上 同

衆院選で議席減らされ 石

ゆっくりとびり山登山親と子と 實

昼月淡く黒鷯ナオ聞く 佐

ヨハネ・パウロ二世グッズをお土産に ズ

愛に加ふる味は大甘 佐

杯を手に恋句に酔はす俳諧師 清

肥後もっこすのしごく白鬚 石

川下り悠久ナウのとき流れゆき 千

いつしか育つ沖の海苔粗朶 ズ

ひとり旅諸国の花を尋ねんや 千

春は闌昇級の夢 實

猫菴庵 東明雅先生を偲ぶ会 式次第

司会 蒲原志げ子 佛淵健悟
 日時 平成十五年十一月二十四日 午前十一時半～午後五時
 於 学士会館

《第1部 追悼会》

- 挨拶 青木秀樹
- 献花
- 献杯 杉内徒司
- スピーチ
- 追悼句披露
- 東家ご挨拶 東 郁子

《第2部 追悼連句会》

- 昼食
- 連句興行

東明雅先生 略年譜

昭和	大正	年号	年	西紀	年齢
14	4		14	一九一五	0
17			17	一九四二	27
20			20	一九四五	30
23			23	一九四八	33
28			28	一九五三	39
31			31	一九五六	42
34			34	一九五九	45
36			36	一九六一	47

事

項

三月七日熊本市に生まれる
 碩台小学校、県立済々黌中学校、第五高等学校（旧制）に学ぶ
 東京帝国大学文学部国文科卒業
 文部省宗教局に奉職
 東京府立第一中学校教諭（国語）
 松本高等学校教授（国語）、松本市に住む
 信州大学助教授
 『西鶴研究第一集』（西鶴学会・古典文庫）
 （以後三二年まで同第二集から第十集まで執筆）
 『つゆ殿物語』（古典文庫）
 『日本永代蔵』（岩波文庫）
 信州大学教授
 『好色五人女』（岩波文庫）
 信州大学文学部において根津芦丈師の連句の講演と実作指導を受ける。その後
 信州大学連句会結成、芦丈師の指導を受ける。

年号	昭和	43	44	45	46	47	49	53	55	56	57	60	61	62	63	2	3	5	6	8	12	13	15
西紀	一九六八	一九六九	一九七〇	一九七一	一九七二	一九七四	一九七八	一九七九	一九八一	一九八二	一九八五	一九八六	一九八七	一九八八	一九九〇	一九九一	一九九三	一九九四	一九九六	一九九六	二〇〇〇	二〇〇一	二〇〇三
年齢	54	55	56	57	58	60	64	66	67	68	71	72	73	74	76	77	79	80	82	86	87	88	

事 項

『万の文反古』(校注古典叢書・明治書院)
『芭蕉の恋句』(岩波新書・青版)
『講座日本文学7』(全国大学国語国文学会・三省堂)
『西鶴』(日本文学資料刊行会・有精堂出版)
『芋日記』根津芦丈三回忌追善集(信州大学連句会・東京都心連句会・松代俳句連盟共編)
『井原西鶴集1』(日本古典文学全集38・小学館)
『夏の日——純正連句とその鑑賞』(角川書店)
『井原西鶴集3』、『井原西鶴集4』(日本古典全書・朝日新聞社)
『連句入門——芭蕉の俳諧に即して』(中公新書)
信州大学定年退官。信州大学名誉教授
南柏に居を構える
『日本水代蔵』『好色五人女』(再版・岩波文庫)
『芭蕉の恋句』(岩波新書・黄版)
朝日カルチャーセンターにて連句入門講座を開講
猫蓑会を主宰(発足)
『季刊連句』発行(四五号まで)
『猫蓑』(永田書房)
『好色五人女 好色二代女』(完訳日本の古典51・小学館)
連句新形式「二十韻」を提唱

『連句辞典』(東京堂出版)
猫蓑会「俳諧芭蕉忌」にて正式俳諧興行(江東区・芭蕉記念館)、以後毎年興行
勲三等旭日中綬章を受ける
『亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧』興行、以後毎年興行
『ねこみの通信』(季刊)発行(継続発行中)
『猫蓑作品集I』刊行(以後、猫蓑会会員の作品集を毎年刊行する)
『新炭俵』(角川書店)
連句新形式「源心」を提唱
『芭蕉の恋句』(特装版・岩波新書の江戸時代)
『芦丈翁俳諧聞書』(自費出版)
『猫蓑庵発句集』(永田書房)
『井原西鶴集1』(新編日本古典文学全集66・小学館)
根津芦丈翁二十三回忌を発起人として修す(於・日本青年館)
『十七季——連句・俳句季語辞典』(三省堂)
十月二十日逝去
戒名 西峯院蘇揚明雅居士
熊本市往生院に眠る

「東明雅先生を偲ぶ会」を終えて

「学士会館の一番広い部屋がとれます」

この電話を受けたとき、「猫蓑庵東明雅先生を偲ぶ会」はきつとうまく行く、と確信できた。

十五年前になるが、昭和六十三年（一九八八）の春、明雅先生の叙勲祝賀のパーティが、やはり神田の学士会館の同じ部屋で開かれた。その時の、なごやかで気持のこもった会場の様子を、すっかり印象に刻んでいたのである。

ただ今度の会場の中央に、先生のお姿はなく、黒枠に収まったお写真を据えなくてはならない……。

どうしてこんなことになったのか、との思いを押し殺し押し殺しして、準備を進めたが、今は亡い式田和子先生の指揮の下、根津芦丈先生の三十三回忌をお手伝いした経験が、役にたった。明雅先生の師匠にあたる芦丈先生追悼の会に準拠するのが、なによりも先生のお心に添うに違いないと考えることができた。

有り難かったのは、会員のどなたに面倒なことをお願いしても、気持よく引受けてくださったことである。宗匠の方々には、失礼かと思っただが、外部からご出席のかたがたのお顔を

ご存じなので、会場の受付等をお願いした。

どの方も、明雅先生から受けたご恩に報いたいとの気持を、熱く持っておられる。その思いが、わたくしたちにもひしひしと伝わってきた。

明雅先生は、常日頃から、「連衆心」の大事さを説いておられたが、まさしく猫蓑会全員の「連衆心」が、発揮されたのである。このことがなによりも全会員から先生への大きな手向けになったと思う。

追悼句も、出席された方は勿論、出席できなかった方々が、全国各地から多く寄せて下さった。なかでも初心の方が、お優しくかった先生との触れ合いを、しっかり句にされていたのが嬉しかった。

猫蓑会事務局 松本 碧

生田目常義

「猫蓑庵東明雅先生追悼集」編集委員

青木秀樹 佛淵健悟 浅賀丁那

八代 嫺 鈴木千恵子 林 鐵男

安曇野は昏れて紫
猫蓑庵 東明雅先生 追悼集

平成十六年五月十日発行（非売品）

編集・発行 猫蓑庵

制作 有限会社オフィスエルク